

南京木屑（ナンジンムーシエ） 4

閑話休題 生きることと学ぶこと

菊 崎 威

今回は特集に沿ってなぜ南京の大学で教える道を選んだのかを語っていただきます。次回からは再び中国の学生との交流に主題をもとす予定です。

（編集部）

私は、高校教師を退職後、中国江蘇省南京市の大学で日本語教師をしている。本誌にその一部をレポートしているが、言語も生活もまったく異なる新しい環境での暮らしは、実に刺激的であり、日々の生活はあらゆる面において発見の連続である。未知の世界は、自分の望むものである限りにおいて、学習意欲を掻き立て、したがって生活意欲も旺盛になる。

高校教師としての37年間、私は多くの先輩教師に手を引いてもらいながら、なんとかやってきた。教研活動や組合運動、そして平和運動など自分の能力にあることなど多々あり、いつも背伸びしながらもやってきた。その中で多くの知己を得、生徒諸君とも良い交流ができた。私は自分が学んだものを生かすべく、また生涯青春でいたいと思い、それゆえ若者と付き合うべく高校の国語教師になったのだが、その思いはほぼ遂げられた。

教師としての晩年、退職が比較的身近な問題になってきたら、6年前頃からだろうが、漠然とではあるが、私は今のような生活を考えるようになっていた。今までとは全く異なる新しい世界に身をおき自分の世界を

広げてみたいと思つた。もちろんすでに何人かの親しい先達がいたことも与つている。そしてまた、中国という国が遠いものではなくなつていた。

私の父母はともに中国旧満州の引揚者である。父は新潟県満蒙开拓青少年義勇軍の指導者であり、母は長野県木祖村开拓団の小学校教師であつた。国策を信じ、勇躍して大陸に渡りながらも、祖国に見捨てられ、塗炭の苦しみをなめつつやつとの思いで帰国した。母の言葉によれば、大志を抱いて渡満し、その大志も花火のように消え、すべての夢が潰えた後、死と隣り合わせの逃避行を繰り返し、身も心もポロポロになつての帰国であつた。この時代の青年はみな、人生におけるもつとも輝かしい時期にもつとも悲惨な体験をしたこととなる。

私は父母の青春の光と影、その胸の内を中国の大地で考えてみたいと思つた。また中国の若者と平和について語り合いたいと思つた。

私の日常は、授業のある日は、朝5時ごろの起床から始まる。ゆつくりとしたストレッチで身体を目覚めさせ、軽く朝食をとり、遅くとも7時半には宿舎を出

る。授業は8時に始まるが、教室にはできるだけ20〜30分前には入るようになっている。カーテンを引き、窓を開け、教室の換気をし、ノートを見ながら授業をイメージする。早くから教室に来て学習している学生がいれば、彼らと雑談するのも楽しいひと時だ。

授業が1コマの日もあれば、3コマの日もある。1コマは休憩10分を挟んで100分授業である。授業は遅い日で5時20分に終了する。内容は教科書に沿いながら、範読・解説・問題演習をする。導入は日本の歴史や文化や民俗に関すること、あるいはまた中国での自身の新しい体験について話す。これが彼らに授業以上に喜ばれているので、時節にふさわしい話題を探し、自分なりに噛み砕いて話す。時には印刷し配布することもある。授業のない時間帯や休みの日はもつぱら教材の研究と作成に費やし、またほぼ毎時間宿題を課している。添削等の処理にも追われる。後半の半年は230人もの作文を見なければならなかつたので、その始末は大変であつた。そのほかに中国人教師に紹介されて、飛び入りで各種論文の添削を持ち込んでくる学生もいて、オーバーワーク気味になることもある。さらには中国人教師の質問などもあるから、日本での

現役時代より机に向かつている時間は長いかもしれない。それでもゆつたりとした生活感覚を得られているのは雑事がないからだろう。

テレビを見ることも少ないので暇な折は音楽を聴いたり読書することになる。時には散歩をしたり、自転車でキャンパスを走ったり、教師仲間とビリヤードや卓球やバドミントンやテニスなどに興じることもある。学生もしばしば訪ねてきては人生談義をしたり、食事をしたりする。休みの日はこれらに掃除・洗濯が加わる。こう見てくるとずいぶん忙しいようだが、だいたい自分の作り出した時間で動いているからである。多忙感はない。

食事は自分でわずか一品をフライパンで作るだけだから造作もない。食材は近くの市場で買ってくる。たまに学生が作ってくれるのもうれしい。安い学生食堂を利用することもあれば、中国人教師たちと軽く一杯やることもある。学生はもちろんのこと若い教師たちが私を大事にしてくれ、その人間関係の良さが日々の生活を充実したものに行っているのは確かだ。

1年間暮らしてきて不安がなかったわけではない。実際困ったこともたびたびあった。言葉が通じないう

えに一人暮らしだから、風邪などで体調が悪くなったりすると往生する。若い時と違って回復に時間がかかり、一度健康を害すと、1週間も10日もずると不調のまま過ごすことになる。前半では足腰の痛みや痺れがさらに不如意の生活を強いていた。それでも気がめいることもなく過ごせたのは学生や教師仲間のおかげだ。中国で生活して心底感心したことは、かれらの優しさである。本当に親身になって心配をし、世話をしてくれる。どれほど彼らに助けられたことだろうか。教えることの不安もあつた。媒介語である中国語の不安もあつたが、今までとはまったく異なる環境で新しいものを教えることの不安は大きかった。しかし、これらも学生の学ぶことへの真摯な態度と熱意がきれいに払拭してくれた。

私は、今の生活が一番望んでいた生活なのではないかと思うことがある。少なくとも、現在に喜びを感じていることは確かだ。新しい環境と新しい人間関係の中で、自分の世界がどんどん広がっていることを実感している。中国の大地と学生が提示する諸問題に触れ、悩み考え、そして新しく学びなおすことによって、改

めて気のつくことや新しく知ることがたくさんある。そういう時にそこはかとなき喜びを感じる。そしてまた自分の成長もそのようにして遂げられていくのだろうと信じている。

変わりのない日常のようであつても、人にとつての一日一日は常に新しい。だからこそ迷いもし失敗もするのであり、また逆に感動も大きい。人生は未知の体験の集積と言つていい。人が一生学び続けることのゆえんでもある。人は常に発展途上にある。だから、人の一生にとつて、その到達点は常に現在である。あるとき、生きることとは学ぶことというテーマで話したことがある。その折、学生に死の直前がその人らしさの極致が現れるのだらうと語つた。彼らは笑つていたが、最近亡くなつた親友の死を改めて振り返り考えたとき、それは確信に変わった。

私は環境が許す限り、今の生活を続けたいと思つている。新鮮な感動を得つつ、学び生きていきたいと思つている。

(きくさき たけし・中国南京市滞在)

(つづく)

京都・美山に学んで(2) 全国農業教育研究会09年

この美山一帯は、山村の内発的發展の典型として教科書にも取り上げられた。町当局の強力な援助で各集落の粘り強い話し合いによつて農地の基盤整備がされ、その地域で生産される農産物(加工品も含め)の産直が、農協と京都生協とで先駆的に取り組まれた。現在、農民組合と消費者である都市の「新婦人の会」組織との産直が發展し、農山村の家族的農業の安定的經營の典型を示してくれている。

また、地元の美山分校(北桑田高校)の開催した「金曜講座」(学校開放講座)は、当時の文部省(文科省)の生涯学習町づくりモデル市町村事業の指定をうけ、趣味的講座ではなく、「地域づくり」をテーマに地域住民と学校が力を合わせ、地域と学校を守る取り組みの一環として發展した。美山町は、平成の合併によつて南丹市となつたが、過疎がすすむ中でも旧村単位の五校もある、小学校の統合は行われていない。

(内山)